

5年以内になる病気 見える化



急速に進歩し、世界中で普及が進む人工知能(AI)。2024年のノーベル賞と物理学賞をAI関連の研究者が受賞し、注目を集める中、私たちの暮らしにもなくてはならない存在になりつつある。京都や滋賀で、健康や衣食、教育など身近な生活に役立つための活用や研究が進む現状を紹介する。

「5年後に高血圧症になるリスクは56%」。団体職員の男性(66)―大津市―は2年前、京都工場保健会(京都市中京区)で受診した人間ドックの結果票にがくせんとした。5年以内に生活習慣病になる確率がAIによって予測され、グラフ化されていたからだ。毎日飲酒を欠かさず、運動もせず、メタボ体形。思い当たる節はたくさんあった。票には、生活習慣を改めるとリスクが49%に減ると書かれ、保健師から飲酒を控えるよう指導された。だが「それだけでは足りない」と言いつつ――。

健康診断ビッグデータから予測

「あなたは5年後のAIリスク予測」。同保健会は2022年から人間ドックの受診者、糖尿病や脂質異常など、生活習慣病とされる6項目に、5年以内に発症するリスクを数値化して結果を返すサービスを始めた。改善策や改善後のリスクも合わせて示すことで、予防に向けて意識を高めてもらう狙いだ。

■ 予防医療時代へ手助け



AIで予測された生活習慣病発症リスクの結果を見ながら健康指導を受ける男性。数値をされるとショックは大きかったという。(京都市中京区・京都工場保健会) 撮影・安達雅文 ※画像の一部を加工しています。

個人の健康データ蓄積アプリ普及 治療の質向上、発症前に予兆検知へ

丸中良典会長は「膨大なデータを有効活用して、健康づくりへの意識を向上させることが、健診の意義を高めると考えた」と話す。

来年度から企業体としての健康診断も行う。例えば、社員100人のうち、5年後に糖尿病や高血圧症になるリスクが100%の人が何人、80%が何人というように、疾病リスクのある人の割合を「見える化」するアイデア。



毎日の健康データを蓄積できるアプリ「健康日記」。将来的には個人の生涯データを予防医療に役立てる仕組みを開発する構想もある(京都市左京区・ヘルステック研究所)



家庭で精密に測れるというオムロンの血圧計。毎日の変化するデータを活用し、脳や心疾患の発症の予兆を検知するAIを開発中だ(向日市・オムロンヘルスケア)

歩数計や心拍が測れる機能が付いたスマートウォッチや、近距離無線通信「Bluetooth」機能付きの体重計や血圧計アプリを連携させて、日々の健康データを蓄積する人が増えている。そんなデータを活用して、病気の発症予防に生かそうとする研究も進められている。

「医療機関でも使われている血圧計で毎日測る数値なので、データとして質が高い。精度が高いAI検知の開発が可能だと考えている」と自信を見せる。

AI検知が運用できれば、患者ごとに発症を予防するための適切な生活習慣の改善方法を提案でき、医師の支援に生かすこともできる。「医療従事者の負担軽減や、地域医療の格差解消にもつながられる。日本だけでなく、世界中の人々にとって役立つ」と見据える先は広い。